

泥以水煉之、名曰研餌、其生魚者用川鯽、泥鱸、小鰻等之生肉、用溪川之魚、不用鹽水之魚也、大抵養山鳥之小者用研餌者多、或用荏麻子、稗子、細稂、亦有之、

〔大和本草十五〕山ガラ 性タクミニシテ慧ナリ、能サヘヅル、又小ガラアリ、山ガラニ似テ小ナリ、

〔和漢三才圖會四十三〕山雀 山陵鳥 正字未詳 俗云也末加良

按、山雀狀似畫眉鳥略、常鳴如曰豆伊豆伊略、每攫物也、有鷹鷲之勢、其屬小雀、四十雀、火雀皆亦

然矣、其肉味不佳、故人不取食、又不入藥用、止畜樊中爲兒女之弄戲耳、

〔喚子鳥下〕粒餌小鳥の分 何にても水を入る

山から 蒸がひ くるみ、豆のごま、花のみ、何れも水入、すり豆は生豆八分、粉壹匁、あをみ入、

大ききすゝめにて、毛色かばいろに、白くろこいねすみまだらふなり、此鳥羽づかひかろく、籠の内にて中歸りするかるき鳥を、小がへりの内、とまり木の上、にいとをよこにはり、段々高くかゑるに、えたがひ、其いとを上へ高くはりふさげ、のちには輪をかけ五尺六尺のかごにても、よくかゑりわぬけするものなり、又藝あり、かごのそとへ出し、やかごを仕出し、くるまぎにつるべを仕かけ、一方に水を入、一方にくるみを入、常に水とゑをひかへするときは、かの水をくみあげ、又はくるみの方を引あげ、よきなくさみなり、籠の内上の方に、ひやうたんにせに、ほどのあなをあけつるべし、夜は其内にとまるなり、此鳥秋の末渡る、其内にて、かるき鳥を見たて、げいを付るなり、さへづりよし、

〔食物和歌本草五〕山雀

山雀は平に温也、物わすれ心をつよふし、智慧をよくます、山雀は身をかろくして、年をのべ鬚髪くろく長生となる

〔拾遺和歌集七〕山がらめ

すけみ